



### 十三（二分四十三秒）

——人のこの世は 永くして——

土間を覆っていた土が、隆起を始める。

「破門のことはあとで聞きます」

そう言つて、蒼泉は楕円形をした二挺の決戦兵器『CHARM』を括つてあつた白いストールを手繰り寄せ、素早く解き、自分の得物である法剣を抱きかかえ、携行モードに畳まれた法槍を、本来の持ち主——翼彩に手渡す。

蒼泉はストールの片端を口に啞えて、もう片端を右脇、左脇、左肩に通して結び、力櫛ちからたすきを作る。

——変わらぬ春と 思えども——

フレーム部と機構部と外装の三重構造になつているヴェーダ社のCHARMだが、その重量はテニスラケットのように軽く、非力な少女でもたやすく取り回しができるようになっていた。それでも、病身の翼彩には少しだけずしりと感じられた。

——はかなき夢と なりにけり——

蒼泉は立ち上がって左手の指二本で刀印を作り、念じるように額に当てる。同時に、右手を懐に入れて自分の専用の青いヴァジュラを取り出し、高く掲げてスイッチを入れ、起動コードを発する。

「——オン・バザラ・ヤキシヤ・ウン」

青いヴァジュラに内蔵されたマグクリスタルが、淡いエメラルド色に光り始める。発光を確認すると、携行モードになっている法剣先端のコネクターにヴァジュラを接続する。端子同士が接続されたかのような複雑な金属音が鳴ると同時に、法剣本体中心の空洞部分に銃撃モード用のグリップが降りてくる。

——あつき涙の まごころを——

隆起した土から、白い蔦状の物体が天井に向かって延びる。

銃撃モードの法剣を脇に挟んで構え、白い物体を狙う。

「私はいつでも戦えます——翼彩様はどうですか」

「待ってっ——！」

——みたまの前に ささげつつ——

翼彩は、動揺していた。

ついさつきまでリラックスしていた空間が、死を内包した空間、そして戦闘空間へと、目まぐるしく認識が

変わっていく。

眼と鼻の先で、異容の物体が形作られる。

無数の白い繊維が重なり、絡み合い、人体の上半身のようなものを形成していく。

三つ又に分かれた繊維が膨らみ、肩や肘の関節が形成される。頂点は頭蓋を思わせる白い球状となり、ふたつの眼窩のうち左側にだけ、大量の球体——いや、オニゲナが密集して生える。

その姿は、日中に交戦したヒュージそのものの姿。

——面影しのぶも 悲しけれ——

発熱で焦点が定まらない眼で、形を成していくヒュージを見ながら。

翼彩は、厨房で林檎の皮を食べたときのことを思い出した。

果実のように食べられる快感を、ちよつと体験してみたい——と。

数時間前、枯葉散る山道を彷徨さまよつたときのことを思い出した。

もしヒュージが食物連鎖の上位にいるのなら、人間はその命を差し出さなくてはいけないのではないかと。

人間は抵抗しているけれど、人間が正しいから抵抗しているわけじゃあない。ただ滅びたくないから抵抗しているだけなんだ。自分たちに天敵が現れたから抵抗しているだけなんだ。

大人しく命を差し出すのが人類の選ぶべき道なのかもしれない。

そう考えたことは幾度もある。

でも、この白い異形が形成されていく様を見て、翼彩は改めて確信した。

——たとえ、自分も、命を差し出すために生まれてきたのだとしても。

——だとしても、嫌だ。

——嫌だ、って叫んでやる。

食べられるのが快感だったとしても、こんな怪物を満たすために生まれてきたつもりはない。

だから——。

命がけで、目の前に立ちはだかったこの一体を倒そう——。

そして、一体一体を確実に倒して。ヒュージのいない世にしよう。

それが、きつとわたしの使命だから。

「迦楼羅の翼——ひろげます！」

——しかはあれども み仏に——

翼彩は、懐からヴァジュラを取り出して前方に突き出し、手癖でくるりと一回転させ、左手で刀印を口許に当て、起動コードを唱える。

「——オン・ガルダヤ・ソワカ！」

朱色のヴァジュラに内蔵されたマジクリスタルが——僅かに、ほんの僅かに光った。

——救われていく 身があれば——

みずみず、わたしのマギが全然チャージされてないかも——と言いながら、ヴァジュラを手首のスナップで何度も振る翼彩。

ヴァジュラのマギクリスタルに使用者のマギが完全充填されるまでには、若く生命力の溢れるリリイでも、一昼夜はかかる。そのため使用者のリリイは肌身離さず携行して、常に充填されている状態を保つことが義務付けられている。

しかし今の翼彩は、悪戯でマギを全解放してしまい、疲労と発熱で倒れて庵の莫塵の上で数時間眠っただけである。マギが如何ほど充填されているかといえ——コップの水に例えれば、一滴二滴というところか。「振ってもだめです翼彩様！　まずは銃撃モードで行きましょう」

——救われていく　身にあれば——

翼彩は携行モードの法槍の先端のコネクターにヴァジュラをセットする。複雑で軽快な金属音が庵に響く。「法槍の待機電源を使って、マギ残量表示モードにして下さい！」

蒼泉がだんだんと太くなっていく白い物体から目と銃口を離さないようにしながら、早口で呼びかける。OKわかってる——と叫びながら、翼彩が法槍本体下部にあるジヨグダイヤルを回すと、畳まれたクリアアレンジの刀身に、透明液晶パネルのように、「00 .. 02 .. 43」と数字が表示される。

「二分——四十三秒しか戦えない——！」

「それまでに調伏ちようつやくしましょう。私がリードします！」

翼彩様は肩を狙つて下さい——と言うやいなや、蒼泉は片膝立ちになり、ヒュージの生えた根本の土に、セミオートで三発ずつ光弾を撃ちこむ。

ヒュージは、手首をだらんと下げたままの姿勢で、肩だけゆらりと持ち上げる。その腕のような部分からは、四本づつの爪が生える。

真つ白な顔の下顎にあたる部分がぼつくりと開く。

それは、苦悶に絶叫する表情にも見えた。

顎の断面は、無数の菌糸が張り巡らされていた。

空洞だった右の眼窩が、無数の小さなオニゲナの傘で満たされていく。

左の眼窩に生えた傘と違い、それは血のように赤かった。

二人は、ヒュージの得体の知れない——しかしこれまでにないほどの、明確な殺意を確信した。

——思いわずらう こともなく——

「——来る！」

翼彩は両肩を狙つて交互に、光弾をセミオートで三発ずつ叩き込んだ。それを何度も繰り返す。

ヒュージの肩が、胴が、光弾の衝撃によつてがくがくと揺れる。

苦痛に歪んだ髑髏のような表情に見える。

次の瞬間、左手をひゅつと伸ばして、弧を描くように真横から翼彩の顔に爪を突き立てようとする。

「はうっ！」

翼彩は身を翻して銃撃モードのまま爪の攻撃を弾くが、体力が快復していないせいで自転に負けて、よろけて地面に膝をついてしまう。

「大丈夫ですか？」

蒼泉が標的から目を離れた隙に、ヒュージの根本を焼こうと銃撃を続ける蒼泉の背後から、大きく湾曲した右手が襲いかかる。

「みずみず、後ろ！」

蒼泉が危険を察してその場から飛び退くと同時に、翼彩がヒュージの右肩に光弾を叩き込む。

——とこしえかけて 安からん——

ヒュージがひるんだ瞬間に、蒼泉が翼彩の隣へ駆け寄る。

「助かりました。残り時間は——」

液晶パネルには「00..02..02」と表示されている。

「あとね——二分二秒！ あ、一秒になった！」

ふと、ヒュージの背後の志妙尼の背中を見る。

清らかな、しかし掠れるような声で、御詠歌を歌い続けていた。

——南無大師遍照尊——



ヒュージが捕食のチャンスを狙うかのように、胴体を延ばして翼彩と蒼泉をゆつくりと囲み始める。同時に両腕も延ばして、挟みこむように二人を追い詰める。

二人のいる土間全体が、布のような、白蛇のような、ヒュージの長い長い胴体と腕に囲まれていく。翼彩は膝をついたまま、蒼泉は腰を落として、背中合わせに迎撃の姿勢を取る。

互いの心臓の鼓動が聞こえてくるかのようだった。

「みずみず、八人がかりで勝てなかったヒュージが、わたしたちだけで倒せるのかな——」  
蒼泉は、勝機はあります——と言う。

「日中の戦いと大きく違うのは、このヒュージが菌類ベースの個体であるということを知っている——ということですよ」

「どういうこと？」

「あとで説明します。その前に、残り時間を」

液晶パネルの表示は「00..01..53」と表示されている。

「いま、残り一分五十三秒だって」

「じゃあ、CHARMを斬撃モードに切り替えて、残り一分まで、なるべく両腕を機能破壊できるようにがんばりましょう」

——南無大師遍照尊——

蒼泉が銃撃モードの法剣の先端からヴァジラを抜いて、本体中央のコネクタに接続すると、金属のロッ

ク音とともに、女声のような不思議なマジ解放音が鳴り、下面から卒塔婆を思わせる切り欠きが入った、クリアグリーンの貴石の刃が展開する。

「一分を切ったらどうするの？」

——と聞きながら、翼彩も法槍本体後部の柄を延ばし、法槍の先端からヴァジュラを抜いて、中央の空洞内にあるコネクターに接続する。やはり女声のようなマジ解放音が鳴り、CHARMの上下に分割収納されていたクリアオレンジの穂先が展開して、斬撃モードが完成する。

「私は右腕を狙います。翼彩様は左腕をなるべく弱体化させて下さい。一分を切ったら教えていただければ」  
仕上げに入りますから——と言って、蒼泉はヒュージの右腕に斬りかかる。

蒼泉の振り下ろした一撃は、ヒュージの右掌に深々と食い込んだ。

しかし切った先から菌繊維が傷口を塞ぎ、逆に法剣を掴まれた形となった。

くっ——！ と吐息を発し、力を込めて法剣を引き抜く蒼泉。

すかさず目の前で刀身を真横に構え、防御の姿勢を取る。

法剣を避けるように、ヒュージの右腕が蒼泉を拘束しようと左に旋回する。鋭利な爪を視界から逃がさないように素早く目で追う。

「——あと何秒ですか？」

「あと一分二十九秒！」

翼彩が、幾度も角度を変えて襲ってくるヒュージの左腕の爪を、法槍の穂先で弾き、肘打ちするかのよう<sup>い</sup>に石突<sup>い</sup>で受け流しながら叫ぶ。

日中の交戦と違って、少しでもヴァジュラにマジが充填されているだけで、病身ながらCHARMとの一体

感が感じられる。

しかし、明らかなヒュージの殺意が、言葉通り——刺すように伝わり、怯んでいる自分がいることも認識している。

脚の震えは恐怖なのか、風邪によるものなのか、最早わからない。

液晶表示を見る。

「00..01..13」

「あと一分十三秒！」

ヒュージの左腕が空中を飛ぶ蛇のように蛇行しながら、爪を伸ばし、翼彩の眼をめがけて襲ってくる。翼彩は法槍の穂先を展開して、襲ってきた白い腕を思い切り挟む。

低音で唸るように、はああああ——と怨念がましい息を吐くヒュージ。苦痛なのか。

翼彩はヒュージの掌を挟んだまま、バスタまきまきアタックだ——と言いながら、法槍をモーター回転させて左腕を巻き取ろうとする。ヒュージは抵抗して暴れ、翼彩を右へ左へと振り回す。

地面を踏みしめて何度も堪えるが、ヒュージの柔軟で強靱な腕は、腕を法槍で絡めた翼彩を持ち上げて、そのまま鈍い音を立てて地面に叩きつける。

「——翼彩様！」

肺の空気を押し出されて、右頬を土まみれにしながらかげほけほと咳き込む翼彩。

激しい動きをしたためか、また体調が悪化したのか、気管支からひゅうひゅうと息が漏れる。

「ん——負けない！　ここで負けたら——」

目の前の一体すら倒せない——。

ここで負けたら——大好きなみずみずとわたしが。

今度こそ、永遠に取り返しのつかない『死』で引き裂かれる——。

翼彩はヒュージの左腕が巻き付いた法槍を、身体全体の力を込めて無理やり引き抜く。剣術における、剣を使つて相手の袖を巻き込む『絡め手』のように、そのゴム紐のような左腕の先端に、複雑な結び目状の塊が出来る上があった。これでしばらく左腕は機能しない。

「左腕、仕上がったよ！」

「あと何秒ですか！」

液晶パネルには「00..01..03」と表示されている。

「一分三秒！」

蒼泉は、獲物をいたぶるがごとく自分の周りを旋回し続ける、右腕の軌跡を見極める。そして、鋭利な爪を生やした掌が正面に来る——その瞬間に狙いを付けて、右回りに振り向き舞うかのごとく、横一文字に切り裂く。菌繊維を断ち切らず、自然に沿うように。

ヒュージの右掌が真つ二つに切断され、蒼泉の身体を左回りに旋回しながら幾重にも取り囲んでいた長い腕は、まるで反物に裁ち缺の刃を滑らせたかのように、太刀筋に沿って鮮やかに裂けていった。

一時的にはあるが、ヒュージの右腕は真つ二つに裂かれた、無力な菌繊維と化した。

ヒュージがいやああ——と、かすれた悲鳴のような息を吐き出し、それまで土間全体を囲い延ばしていた細長い身体を、巻尺を収納するかのよう<sup>メジャー</sup>に急いで縮め、三、四メートルほどのサイズに戻した。

翼彩の目には、ヒュージが苦痛で恐怖を覚え、身を固めて守つたふう<sup>メジャー</sup>に感じられた。

「こちらでも終わりましたが、すぐ傷は修復するでしょう！」

あと何秒ですか——と尋ねる蒼泉に、翼彩は、ごめん一分切っちゃってた！ と答える。

「00..00..58」

「了解です。では仕上げに入ります！ 翼彩様、私とミラーリングをして下さい！」

「えっ——や、やってみる！」

「00..00..53」

ヒューズは己の両腕を修復させようと、両肩を、上半身を、闇雲に振り回しながら藻掻いている。その醜悪な姿を横目で見ながら、蒼泉は庵の隅の戸板へ駆ける。

「何するのっ？」

意図はわからなかったが、翼彩も蒼泉の真似をして、対角線状の土間の隅に駆ける。

蒼泉はやって下さいとばかりに翼彩の眼を見てから、法剣の刀身を目の前の柱に向けて、袈裟斬りに叩き込んだ。

「えっ——？」

翼彩が啞然としている間にも、マジの力を帯びた法剣の刀身は、レアチーズケーキを切るかのごとく軽々と柱に食い込み、蒼泉が左手を添えて押しこむと完全に分断された。

「00..00..44」

庵全体が木の軋む音を立てる。

質量のある塊が、落葉の上に次々と落下する音が聞こえる。屋根の重し石か。

「壊れちゃう——これじゃあ」

この志良庵は、庵というものの、要は簡素な山小屋である。土間二部屋で合計六本の柱しかないため、そ

のうち四本を切つてしまえば、この木造建築の出来損ないは、にべもなく瓦解するだろう。

——そういうことか。

翼彩は、蒼泉の仕上げの方法を理解して。

「庵主さま、絵馬持つて逃げて下さい！」

そう叫んだ。

蒼泉を真似て、目の前にある柱に法槍の穂先を振り下ろす。二人が居た土間と志妙尼が御詠歌を歌っていた土間の境界の柱が、上下でずれて、斜めの切断面を見せる。

「00..00..36」

ヒュージがだらしなく延ばしたままの胴体を地面に横たわらせ、両腕の使えない上半身を持ち上げて、リリースを威嚇するかのようにくねらせて暴れる。まるで頭を潰された大蜈蚣むかでのように、誰を狙うでもなく不気味に跳ねまわっている。しかしいつ両腕が修復されるかわからない。

怨念がましく震えた呼吸音が、翼彩と蒼泉の背中を総毛立たせる。

「うろも煩いから、いったん寸々すたすたにします！」

「00..00..32」

蒼泉がヒュージに向き直り、法剣を横に構えながら駆け出す。

翼彩も蒼泉に合わせて、法槍を構えて駆け出す。

二人はそれぞれヒュージの身体の斜め前後から迫り、疾風のようなスピードで、右袈裟斬り、左袈裟斬りを浴びせ、胸部と背部に向かって法剣と法槍を突き立てる。

顎を大きく震わせて、苦悶の表情を見せるヒュージ。

「00..00..24」

二人同時に切つ先を引き抜いて、最後に横一文字斬りを浴びせて身を翻し、ヒュージに背中を向けてお互い対角線上の柱——次の自分たちの持ち場へ走る。

ヒュージにとつてこんな斬撃は、一時しのぎのダメージでしかないが、少しだけ時間の猶予は得られた。蒼泉が土間と土間をつなぐもう一本の柱に法剣を打ち込む。

翼彩が切つた柱の向かいにある柱は、法剣の斬撃を深々と受けて、屋根を含めた柱三本分の重量が一気に法剣にのしかかる。

「くっ——だんだんやりづらくなつてます——！」

蒼泉の額に汗が浮かび、幻想的な色に見える髪を頬に張り付かせる。

「00..00..18」

一方翼彩も、蒼泉が切つた入口側の柱の向かいにある柱に、斧のように何度も穂先を叩きつける。その振動で、庵全体がぐらりぐらりと大きく揺れる。

「翼彩様——あんまり揺らさないほうが」

「ごめん、これつてあんま切るのに向いてないから——」

しかしそれでも、マジが充填されて切れ味が倍加した法槍によって、翼彩の目の前の柱は四く五センチの細さでつながっている状態になり、今にも崩れそうになっていた。

翼彩はふと、志妙尼のいたはずの場所を見る。

そこには、もう老僧の丸い背中は見当たらなかった。

——庵主さま、避難できたんだ。

小さな安堵感が空気のように、翼彩の気管支に温かく拡がった。

一方ヒューズの右腕は、みるみると修復を初めて、あと数秒で戦闘可能になるうかという状態を見せている。柱から法剣を抜いた蒼泉が、これから総仕上げに入ります、と叫んだ。

「そおれ、でもう一回柱を斬りますから、庵から逃げて下さい！」

「それもミラーリングでいいよね？」

「00..00..08」

蒼泉が、そおれ——と叫んだ。

翼彩も、そおれ——と叫んで咳込んだ。

二人が、それぞれの目の前の柱に、乾いた斬撃音を立てて、CHARMの刀身で斬りつける。

柱が軋む音が続いたあと、外の重し石が次々と落ちる音が聞こえる。

翼彩は一瞬天井の梁を見る。

バランスを失って歪んでくる。歪んでくる。

この庵全体が異常空間であつたかのように、全体が歪む。

もう、この庵はおしまいなんだ——。

庵主さまと晶良さんの暮らしはおしまいなんだ——。

このお墓は、おしまいなんだ——。

わたしたちが引導を渡しちやつたんだ——。

庵主さま、ごめんなさい。



「翼彩様、逃げて下さい！」

蒼泉の言葉に翼彩は我に返り、急いで壁板に体当たりして、庵の外に転がるように飛び出す。庵の外にはすでに蒼泉がいた。

[00..00..05]

崩壊する柱とともに、壁板が撓む音を立てて割れていく。

支えを失った梁から十六年分の煤埃すすほこりが落ちて、地面に砂煙のように舞い散る。

[00..00..03]

胴体を寸々にされながらも、やつと修復を終えた右腕を振りかざそうとするヒュージの頭上に、屋根板が積み重なるように次々と落ちる。

庵がずしりと崩れ、瓦礫の山となる。

囲炉裏の上に吊るされていた鉄瓶が落ちたのか、じゆう、と音を立て、瓦礫の隙間から濛々と蒸気が上がる。  
「今です！」

[00..00..01]

蒼泉が、翼彩が、瓦礫の上に駆け乗る。

CHARMを逆手に持ち替える。

そして屋根板に押し潰されたヒュージの上に立ち、頭上から地下、晶良の遺骨までを——渾身のマギを込めて、法剣と法槍が刺し貫いた。

リリイ二人の足許で激しい振動が起きて。

[00..00..00]

やがて——ヒュージも、翼彩のヴァジュラも、動かなくなった。

翼彩が屋根板の上に、ぺたんと内股で座り込む。

肩の力を落として、ミラーリングって難しいね——と力なく笑う。

蒼泉はお疲れ様でしたと言つて、屋根板に突き立てられた法剣を通り過ぎて翼彩に歩み寄る。

「みずみず、すごいね。わたしは力使い果たしたのに、みずみずはまだしっかりしてる——やっぱり先輩みた  
い」

蒼泉は翼彩を労うような無表情で、私が後輩です——と言いながら、人差し指と中指を立てて、指の背で自分の額の汗を拭う。

そして、あとで説明しますと言いましたね——と、足許の屋根板を見る。

「キノコの表に出ている部分は子実体といって、本体はあくまでも遺骨の残滓に根を張っている菌糸体の方なんです。日中は、ケイブの向こうの菌糸体には手が届きませんでした。でもこの場所なら、真上から子実体も菌糸体も一突きにできました」

それが私たちのアドバンテージでした、と言つて、蒼泉が安堵のため息をつく。

「ガーデンに帰りましょう」

蒼泉が、瓦礫の上に座り込んだ翼彩に手を差し伸べる。

「でも、私——」

破門のことを、勢いで蒼泉に言つてしまった。胸が締め付けられる。

「大丈夫です。阿闍梨様には私からも——」

「手が届きませんでした」

えっ——？ とつぶやいて、翼彩が不思議そうに蒼泉を見上げる。  
蒼泉もきよろきよろと辺りを見回す。

「手が届きとどきませんでした」

「手のとどどどどどどどどど、ど、ど」

翼彩が。蒼泉が。

大きく息を吸い込む。

瞬間的に、自分たちの身にながら起きてくるかを把握した。

CHARMを突き立てた箇所——蒼泉の真後ろから、足許の屋根板を勢い良く吹き飛ばして、音声模写をしながらヒュージの白い上半身が姿を現した。

宙に舞って降り注ぐ木屑と煤埃の向こうに、白い顔と、三つに裂かれて割れた顎が見える。

「まだ——生きてる！」

復讐を果たさんとする怨霊のように、蒼泉の背後から二人を睨めつけている。

その左腕は翼彩に絡められた塊のままとなっており機能しそうにないものの、右腕は完全に修復されて、長い錐状の爪が何本も生えている。法剣と法槍はそれぞれヒュージの前後から刺さっており、二本とも刀身が菌

繊維に包まれて、取り返すのも困難な状態だ。

翼彩は硬直していた。動けたとしても、マジの残っていないCHARMはきつと役に立たない。

蒼泉は頭を動かさないまま視線を真横に、神経を真後ろに集中させて敵の気配を探るが、動作が静かすぎて何もわからない。

二人の心臓の鼓動が高まる。

翼彩は、蒼泉の長い髪の毛の向こうに——鋭利な何かを見た。

「みずみず、危ない！」

翼彩が、蒼泉を右側に突き飛ばす。

左掌を自分の顔にかざしながらヒュージの前に立ちはだかる。

次の瞬間、翼彩の掌はヒュージの鋭利な一本の爪に刺し貫かれた。

「翼彩様！」

ヒュージの背後に回って法剣を抜こうとしていた蒼泉が、翼彩の苦悶の表情に叫び声をあげる。

翼彩はヒュージの腕を押し戻そうとするが、非力で華奢な腕では持ちこたえることができない。

——痛い。左手に力が入らない。痛すぎて手が勝手に<sup>ふるえ</sup>痙攣してしまう。

翼彩のなかの時間が止まる。

思考も止まったのか——いや、むしろ冴えた気がする。

翼彩は貫かれたままの左手でヒュージの爪を掴み、叫ぶ。

「みずみず！ わたしと——ミラーリングして！」

ヒュージの背中から、法剣を無理やり引つ張ろうとする蒼泉が、えっ——？ と疑問の無表情を見せたあと、

わかりましたと応えた。

膝立ちになった翼彩が、ヒュージの胸部に刺さったままの法槍に手を伸ばす。

そして、がっしりと掴む。

翼彩は、法槍のコネクターからヴァジュラをイジエクトして、

蒼泉は、法剣のコネクターからヴァジュラをイジエクトして、

ヒュージの前頭部を狙い。

ヒュージの後頭部を狙い。

今度こそ外さないよう——同時に。

今度こそ外さないよう——同時に。

『アサルト  
調伏！』

そう叫んで、刺した。

ヒュージの頭部の中で、ヴァジュラ同士が接触する。

その瞬間。

蒼泉のヴァジュラがエメラルド色の閃光を発し、これに共鳴するように翼彩のヴァジュラもオレンジ色に光輝く。

「最後に鬼神が叫ぶかのごときマジ解放音と、怪鳥音を思わせる、耳を劈く衝撃音が響く。

光と音は二人を、庵の残骸を、山の付近一帯を強く照らす。

その光景はまるで、悪鬼を食らう夜叉の荒ぶりと、護法に猛る迦楼羅の炎のよう。

二色の光がまばゆい光を発するなかで、ヒュージの上半身の影は、悪霊が果つるかのように黒い炭となって

いく。

甲高い衝撃音はやがて、この世の終わりを思わせる地響きに変わる。

ヒュージを滅ぼした光は、十字に輝く粒となつて天に昇り、冬の夜空に瞬く星々の仲間入りをするかのよう  
に、静かに消えていった。

——電磁誘導。

蒼泉のヴァジュラに残っていたマジがコイルチップを通して、翼彩のヴァジュラに内蔵されたコイルチップ  
と共鳴を起こし、ヒュージの前後から電磁力化したマジを送り込んだのだ。

十四年間にわたつて京の人々を襲い続けたミドル級ヒュージは、十二月二十七日深夜——二人のリリイによつ  
て消滅した。

「こんな風にね——厨房を壊しちゃつたの」

しばしの静寂のあと、翼彩は放心の表情をしながらヴァジュラをぼとりと地面に落とし、内股で座り込む。  
そして思い出したように、痛たたたつ——と言いながら、手空きになつた右手ですかさず左手を押さえた。

蒼泉もヴァジュラを懐に仕舞い、大丈夫ですかと言つてしゃがみこみ、翼彩の左手を両手で包み込んで傷口  
を見る。

「手の平の真ん中ではなく、中指と薬指の間の股を貫通したんですね。筋肉や神経がない場所だから後遺症は  
残らないと思いますけど——痛かつたでしょう」

私なんかのために——と、蒼泉が翼彩の左手を包み込んだまま、遣り切れない無表情を見せる。

翼彩は、大きく口を開けてにつこり笑いながら。

傷ついたり折れたりしたら、一緒に笑おうって言ったはずだよ——と、優しくささやいた。

蒼泉も、そうでしたね——と頷く。

翼彩は、動かさなければもう痛くないよ、動かしても大丈夫と言いながら、左手をぶらぶらと揺らしたかと思うと、あうつ、と小さな悲鳴を上げて肩をすくめる。

「もう——無理せんといして下さい——」

大切なお人なんやから、と言いながら、蒼泉は翼彩の手指をそつと自分のほうに寄せると、伏し目がちの視線で、傷口に触れるように唇を当てた。

「あつ——」

弱々しい声で、翼彩が鳴く。

翼彩の手の平から流れる血を口に含んで、それを唾液と一緒に足元の屋根板に垂らす。

また傷口に口を当てて、ゆっくり絞り取るかのように血を吸って、また垂らす。

「痛い——ちよつと痛いよ——」

毒や胞子があるかもしれないからと言って、蒼泉がまた吸う。

蒼泉は薄目を開けながら、翼彩の手の平と手の甲を両側から交互に舌を這わせ、乾きかけた血液をなめずるようにして掬い取る。

翼彩はその無表情を見て、自分が蒼泉に食べられようとしている、そんな錯覚に陥った。

「みずみず——」

傷口を吸われるのは、少しちくつとするけれど、この蒼泉の舌に血を奪われていく感覚は、初めて味わうものだった。なんだか指と指の間が熱くなって、むずむずするかのよう。

痛いのに気持ちいいとか、ちよつとわたしおかしい——翼彩は、蒼泉の舌に反応する自分の体に戸惑った。そんな興奮を誤魔化すかのように、みずみずだつて血吸ったら危ないかもよ——と、頬を赤らめながら、上目遣いに蒼泉を見て、か細くつぶやく。

「私は胞子ぐらい、喰らつてやりますから」

そう言い放つた蒼泉の瞳は、何かに陶醉したかのように妖しく潤んでいた。

戦闘のときにもさほど乱れていなかった、蒼泉の薄水色の髪が、自分の傷口を吸う動作でこんなに乱れてしまつて。

その姿がなんとも言えず、艶めかしくて。

——なんだろう、この、胸のぼくぼくする感じ。

翼彩の思考は、何かに辿り着きそうで、辿りつけなかった。

地面は先程の衝撃によつて浅いすり鉢状に抉れて、まだ熱を帯びていた。一番深い中心部は、ヒュージの菌糸があつた場所——つまり、晶良の遺骨があつた場所だろう。

「ご遺骨——なくなつちやつたかな」

翼彩がつぶやく。

「あつたとしたら私たちが茶毘に付したことになりますが、多分、もうご遺骨はほとんど残っていないかつたと思ひます」

養分がなくなつたから人を襲い始めたんです——と、蒼泉も地面を見ながらつぶやく。

「オニゲナが早々にご遺骨を分解したんじゃないか——と私は思つてます。翼彩様、インフィニティ・ベリア



ル・スーツつてご存知ですか？」

あ、なんかのゲームのラスボスだっけ？ と、翼彩が首を傾げる。

「いえ、まるつきり違います。海外の話でまだ実用化はされてませんが、分解性の高いキノコの胞子が入った死装束をご遺体に着せて埋葬すると、キノコが早く遺体を分解してくれて、腐敗も短期間だしエコにもいいね——みたいな、そういうアイデアがあるらしいんです。多分オニゲナ、というかあのヒュージも、分解性の高いキノコの特性を持っていたんじゃないでしょうか」

「分解性の高いキノコだったから、早く次の養分が必要になって人を襲ったってこと？」  
かもです——と、蒼泉が人差し指を立てる。

「庵主様の容姿、おかしいと思いませんか？」

「え、思わなかった、っていうかこの制服のほうが僧衣としてはおかしいよね。ペチコートとか」  
服の話やなくて、と蒼泉が止める。

「そうじゃなくて——十六年前に少女だったにしては、大分お年を召していませんか？」  
口をぽっかり開けて、翼彩が黙る。

「あ——」

確かに志妙尼の容姿は六十〜七十代の女性のようだ。

ちよつとファンタジーの領域になってしまっただけで、と蒼泉は前置きをしたうえで、自分の考えを開陳する。

「庵主様はなんらかの方法で、ヒュージに養分をやっていたのではないか、それで、年齢以上に老いを重ねられてしまったのではないかと——」

「えつ、どういふこと？」

「翼彩の問いに、そこは御仏のみぞ知るです——、と蒼泉が星空を見上げる。びゅうびゅうと吹いていた風はいつのまにか柔らかな夜風になっていた。しかし冬の風には違いない。冷たい風だが、翼彩の跳ね上がった前髪と額を気持ちよく涼ませる。

まだ首筋は寒く、顔全体が火照っているのがわかる。

「——つていふか！」

翼彩は、辛うじて残骸が残っている、囲炉裏のある土間を見る。

「庵主さまは？——庵主さまはどこ？」

四つん這いの姿勢で土間に向かおうとすると、視界がほんのりと暗くなる。見上げると——二人の背後には志妙尼が立っていた。

「庵主様——」

「庵主さま、大切な庵、壊しちゃって——ごめんなさい——」

大騒ぎを起こして、なんと言ったらいいのかわからず、翼彩はとにかく謝罪がしたかった。

「わたし、語り継ぎますから！ きつと語り継ぎますから——！」

志妙尼は、左手に持った数珠をじやらりと鳴らして。

「——おしようしな」

と言つて、金剛合掌をしながら、深々とお辞儀をした。

その皺だらけの頬には、涙が溢れかえっていた。

「お、おしようしなつてどういふ意味——？」

不意に知らない言葉が出てきたので蒼泉に尋ねる。蒼泉も、わかりません——と言って、翼彩と顔を合わせ

る。  
「庵主さま——それって」

翼彩が再び見上げると、もうそこには、人影はなかった。

翼彩が立ち上がる。辺りを見回す。

「庵主さま！ 庵主さまあ——！」

蒼泉が座り込んだまま翼彩のスカートの裾を引っ張り、悲しそうな無表情で首を振る。

「ご遺骨がなくなつてヒュージが消滅した以上、もうあの方とこの御山を結ぶものはなにもありません」

そうかも、と翼彩もつぶやいた。

「庵主さまは、晶良さんと過ごせる新しい園ガーデンを探しに行つたんだね」

翼彩がふと、志妙尼の座つていた辺りに目を遣ると、木屑にまみれた和箆笥の上にあつたはずの晶良の位牌は消えていた。

庵主さま——いや、志げさんにとっては、俗世こそ異界になるかもしれない。

でも、志げさんと晶良さんの間に確かにあつたはずの、お互いを想い合う気持ち。

仏徒としての戒めや日本の法律も関係なく、ただただ愛し合った命と命。

その記憶さえあれば、生きていけるんだろう。

そう思ったとき、翼彩の胸は、ほんの少しだけ冬の夜の寒さを忘れた。

遠くの方から微かに、おうい、という声が聞こえる。

無事でございますか——と叫ぶ声。

情熱見せるツス——。

迷惑してますから早く出てきて——。

野ざらしになるつもりでござんすか——。

どこにおつとつと——。

艮の金神様うしじんがお捜しぎぞ——。

木々がとところどころ、一瞬だけ明るく照らされる。

「ほのほさんたちだ——」

「心配かけてしまったみたいですね」

翼彩と蒼泉は、自分たちの捜索が行われていたことに思い至る。

私たちも、私たちの園ガーデンに帰りましょう——と言う蒼泉に、もうちよつとだけ待って、と翼彩が手を出して制止する。

よろよろと瓦礫の上を歩いて、この辺かな——と言いながら四つん這いになり、木片や屋根板を掘り起こし、掻き分ける。

小首を傾げる蒼泉に背中を向けて、あった——！ と叫んで、翼彩がよろよろと戻ってくる。

再び座り込んだ翼彩の脇には、ムカサリ絵馬が抱えられていた。

「これをね——なるべく壊さないように、柱を斜めに切ったの」

「翼彩様——」

蒼泉が口に手を当てて驚く。

斜めに切ったからといって、屋根が形を保ったまま綺麗に崩れるわけもなく、実際、ムカサリ絵馬のポートルトの硝子には激しく罅ひびが入っていた。蒼泉が驚いたのは、あの戦いのなかで柱の崩れる位置を——ムカサリ絵馬の無事を考えていたことに対してだった。

出来れば奉納したかったからと言いながら、なるべく座り位置から離れた場所に腰をひねり、ばんばんと硝子片を瓦礫の上に落とす。

「やっぱり庵主さま、絵馬を持って行くのは無理だった——よね」

「いえ、持って行かなかったのではなく、翼彩様に託したのではないかと思えます」

すっかり硝子のなくなったムカサリ絵馬のポートルトを蒼泉に見せると、蒼泉も翼彩の左隣に座り、顔を近づける。

そのとき思い出したかのように、力禱代わりになっていたストールを解き、翼彩の首を経由して自分の首にも巻く。

「——あったかい」

ほっ、とうれしそうに安堵の息をつく翼彩。

「翼彩様——首から風邪引くタイプでしたものね」

「そうだけど、このストール、みずみずの体温があったから——今、羽毛に包まれたみたいにうれしかったの——」と言った。

蒼泉は無表情だったが、その瞳はきらきらと輝いていた。

二人は頬と頬を密着させる。

蒼泉の頬は翼彩の火照りを冷まし、翼彩の頬は蒼泉を温めた——だけでなく、心臓の中から火照らせた。

絵馬に書かれた小さな文字を読む。

庵の中に架けられていたときは小さくて読めなかつた文字だ。

「これが——さつき言われていたポエム、ですね」

「そう——だね。謎が秘められてたりしないよね」

「二人分の筆跡で書かれてますが、交互に書いて遊んだだけかと思えます。他意は感じません」

「志げさんと晶良さん、幸せだったのかな」

「私は理解できなかったから、わからないです」

「——可哀想、だったね」

「——それは、わかります」

夜空の寒さのせいなのか。

それとも感情が破れたのか。

どうしてだか、ムカサリ絵馬のポートレートを持つ手が震えて。

写真のなかで永遠に微笑む花嫁の上に。

幾滴も幾滴も、二人の涙が滴り続けた。

志げは文金高島田

白無垢姿に角隠し

晶良のドレスはベルライン

ベールの向こうはお姫さま

ブウケの花束投げましょね

三三九度も交わしましょう

恋いの可憐な花ひらく

迎去り二人のものがたり

(続)

---

---

## 十三(二分四十三秒)PDF版

発行日 2018年4月9日

著者 DOGMASK  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---